

## 「愚者ぐしゃになりて往生おうじょうす」

吉田 顯成

親鸞聖人は、関東にいる門弟に対して、念仏の教えを伝えるためにたくさんのご消息（お手紙）を京都から書き送りました。その中でも最晩年の88歳の時に書かれたご消息の中にあり、親鸞聖人が師である法然上人から直接聞かれた大切な教えがこの言葉です。

「愚者になる」とは一体どういう事なのでしょう。ここで言う「愚かさ」とは、教養の有無において語られる愚かさではありません。人間である限り誰もがもっている根源的な愚かさのことを指します。たとえば、欲望にとらわれて自分を見失ったり、自分にとって都合の悪いものを排除しようとして、他者を傷つけ悲しませたりするような愚かさです。状況によっては、悲しい結果を招くような言動をとってしまう、そこに人間の愚かさがあると言えるでしょう。

「愚者になる」とは、そのようにして生きる自分自身の愚かさをよく知ることです。そして、自分自身の姿に目を背けることなく、愚者の自覚を持つ者こそが、「まことに生きる者である」ということを述べているのです。

自分の愚かさを自覚するという事はなかなかできることではありません。なぜならば、私たちは少しでも自分の姿をよく見せようとしたり、時には自己弁護したり正当化したりして、自分自身の本当の姿からつい目を背けてしまうからです。しかし、「愚者になる」ことによって開かれてくる生き方があることを、私たちは法然上人や親鸞聖人の人生から学ぶことができます。

法然上人や親鸞聖人がたくさんの方を生み出したのは、そのような生き方と無関係ではないでしょう。自分の愚かさを認めるところから、他者を理解し、人々との深い関わりを持つことが可能となるのです。